

薪の火を焚く

八木秋子

都會をはなれて二ヶ月を暮した
腹の底から都會がいまはしい
理論でなく呪ひたくなつた
なつかしいのは多数の同志
その他の人間も生活もみんないやだ
だがあの都會に生きねばならぬ人たち
頑張らねばならぬ人等のことを考へる
空き腹であの困難な仕事をやつてゐる夫だ。
都會を呪ふことは私の贅澤であらうか。

飢えた民衆をいつばい呑みこんで
東京はいよ／＼大きくふくれるさうだ
風船玉はふくれるまきまつてはぢける
どし／＼巷瓦斯を流してやらう
どんなに厚いゴムだつてきつこはじける

それちがつた年寄りの百姓が
破れた蛇の目をさしていつた
「へえ、今晚は、どち／＼おいでるな」
養子寺の總代衆はこすい話した人だ
類かむりの孫がみおくつてゐる

雨ふりの夜は爐の火が赤く燃えてゐた
手づくりの漉茶を汲んでくれる同志
同志のお母さんは寝れてねむつてゐる
會ひたくて會へなかつた
初めて見る同志たちの顔がやたらに嬉しい
七里の山道を不自由なその脚で
米を背負つてきたのですか、友よ
あなたの汗で作られた米だ
のび／＼と御馳走になりませう今宵は。

響く敵にゴム靴で峠を越へて
未知の人を訪ねてゆく堅い足どり
青年會に處女會に香調に
浸みこぼつてゆく黒き思想、勝利の確信。
一つの眼でたない眞實の努力が
百千の叛逆の言葉にも勝る

たゞ眞實の愛慕しみを怒りが
わたしたちを隔りたてるのだ
こゝには華かさも誇張もない
謙虚な魂が大地のやまに微笑んでゐる

村の土は靜かに動いてゐる、地の底から
農家の塀や壁にびつたり貼りついた
古新聞紙のボスターに陽ががややく
山のやうに芝草を背負つた村びと達が
澁ッこ見入つてゐる途かな文字である
村の権力者たちが準備をかくす今日だ
六年の月日を塗りつけてきた石た

だがあなたは想像するだらうか
農民をしぼる因習と傳統のカミ食慾と
奴隷觀念のさびついた道のくさりか
どれほど太く重たく固いかを
そしてあなたは知るだらうか
村に激しい苦悶で生きる多数の同志達が
壓制者の鋭い及み限のひかりの下に
頸を断ち切れぬうち鳴らす鐘のひびきを
理論や叫喚でなく事件の建設のために
生命をかけた闘ひの決意がたを。

月がけ十五錢の無盡講の金で
葺いたばかりの板屋根にあたる雨の音
見あけるわたし達のこゝろも楽しい。
友よ薪の火を、かきたてよう。

一九三二・九・一七



写真裏に八木による書き込み「(昭和)41年7月 和佐田兄より/
たぶん昭和11年ごろ/所はあそこかと思う/ああ、30年のとお
い月日」。しかし、昭和11(1936)年は八木は獄中にあり。

松本會議にいく伊沢(八十吉)は前後発つて小野までは電車、その
先の旅費を節約するため、幼児期の疾病による不自由な脚力に耐
えながら、夜を徹して歩き続け、翌朝、島津の下宿先に辿りついた。
八木秋子は、集合した信州同志達の身を挺して闘う、その場の感動

を、さらにまた、信濃の分水嶺に位置する木曾川辺り奈良井の甥の
家に二ヶ月暮らして、這いつくばつてもなお生き突く小集落に
いて、激しく馳せる決意の心情を吐露し、全国全読者に向け次の「右
記」詩を叙した。

農村青年社「事件」

「第一秘發第三三〇號」
昭和十一年五月四日

警察部長

殿下各警察署署長殿

秘密結社農村青年社、検挙取締一團スル件
 標榜農村青年社ハ予テ長野縣ニ於テ中心分子ヲ
 検挙取締中、宛今同概要判明セルカ、該社ハ無政
 府共黨社會ノ実現ヲ企圖スル秘密結社ニシテ其ノ
 組織ハ赤ク類例ナキ自主分散形態ヲ採リ巧ミテ
 挙取ヲ進メ求リタルモノニシテ、革命執行ノ手
 段トシテ信州暴動計画ヲ樹シタル事案アルノミ

神奈川県警察部長による農村青年社関係者に対する検挙指令の表紙(1937.5.4)。特高関係資料において、個別の事件で人物を特定しての検挙を指示した例は他にないという。



農村青年社被告 悉く減刑判決

星野二平 鈴木宮崎三郎

東京控訴院量刑判決決定の報道記事(信濃毎日新聞/1937年10月27日)。判決の後、宮崎は小菅刑務所、鈴木と八木は豊多摩刑務所、星野は妻子のいる古屋に移送され、保釈中の和佐田は郷里の広島において、それぞれ服役した。

1936年5月4日、全国検挙の前日に新聞各社は記事差し止めを命じられた。予審が同年12月31日に終結し、翌年1月11日正午に新聞報道が解禁され、各社が一斉に号外を発した。「各社各様に、信州武装蜂起談を前面に押し出し、真偽虚飾して民衆心理を攪乱し、極左農村青年社として限りなく恐怖を掻き立てた」(資料集)

読書新聞 號外

信州中心に武装蜂起 恐るべき都市焼却計畫
 無政府農村青年社事件
 検挙二百餘名 豫審終結す

各地の検挙状況
 全日本に及ぶ
 二重の父親
 首魁の鈴木七名
 東京で逮捕す
 軍艦へ官轉

危かつた信州各都市
 資金稼ぎの銀行ヤンキーに失敗
 窃盗團で一萬數千圓

起訴三十三名 府廳官長名

報知新聞 號外

全国的武装蜂起へ
 長野松本から焼拂へ
 一髪！未然に暴露して
 縣下で十五名起訴

思ふつはへ落てゆく
 底なき農村疲弊
 先づ青年の純情を蝕む

村落を基礎體に
 網状蜂起を企圖
 無政府主義分散組織

悪につよきもの
 善にもまたつよし
 十五名起訴

起訴者十五名

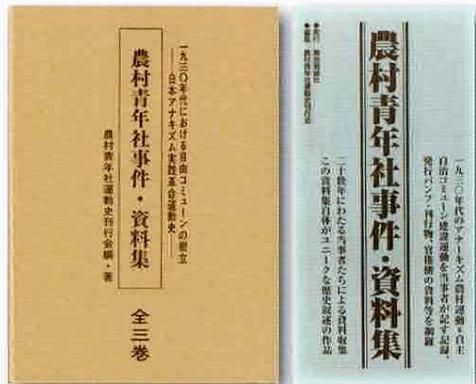
報知新聞号外(1937年1月11日付)
 「農村不況を巧みに利用した果敢な日常闘争で純真無垢な農村青年、しかも信望の的たる模範青年を獲得した巧妙な戦術は、従来の都会的、親念的、理論闘争中心のアナ系運動には見られぬ顕著な特色を有してをり」[全国的にも無政府主義陰謀としては実に幸徳秋水事件以来の組織的大暴動計画でこれを未然に破壊させた県警察部の活躍は殊勲甲に値するものがある]

讀書新聞号外(1937年1月11日付)
 「黒色テロに日本を黒一色に塗りつぶさんとした恐るべき大陰謀事件も僅かに窃盗によって資金獲得の緒についた程度において未然に防ぎ得たことを喜んだ当局は十一日正午を期して一切の報道禁止を解いた」

「農村青年社事件・資料集」



1935年8月26日、宮崎県の久原房之助邸襲撃事件らびに第一次農村青年社事件(資金活動)による累犯満期出所の日。小菅刑務所前。前列左から鈴木靖之、大塚貞三郎、望月治郎、長谷川武。中列左から星野、梅本英三、大日向盛平、陳哲、草村欽治、太田光衛。後列左から島津徳三郎、伊藤悦太郎、船木上。



『農村青年社事件・資料集』(農村青年社運動史刊行会・代表:星野準二)は黒色戦線社から第1巻が1991年1月15日、第2巻が同年10月1日、第3巻が94年12月25日、別冊・付録が97年8月に刊行された。刊行会は星野のほか、伊沢八十吉、山田彰、南沢袈裟松、和佐田芳雄、別所孝三の6名。「老友の同志、大島英三郎による発想から手がけたこの資料集全三巻は、若い同志相京範昭による発掘と編集、刊行までの作業をすべてを負って、さらに、大島同志の情熱的積極共同によってこれが成果を為し得るのであった」(星野準二「あとがき」『資料集III』より)



1932年1月、八木が南澤に宛てた書簡。「今後の出版物もより実践的、戦闘的になすべき方針です」。これらの書簡類は南澤が甥宅の屋根裏に隠してあった。

資料名	内容	備考
1	八木が南澤宛てた書簡(1932年1月)	今後の出版物に関する方針
2	南澤の日記(1932年)	活動の記録
3	南澤の書簡類	甥宅の屋根裏に隠されていた
4	南澤の日記(1933年)	活動の記録
5	南澤の日記(1934年)	活動の記録
6	南澤の日記(1935年)	活動の記録
7	南澤の日記(1936年)	活動の記録
8	南澤の日記(1937年)	活動の記録
9	南澤の日記(1938年)	活動の記録
10	南澤の日記(1939年)	活動の記録
11	南澤の日記(1940年)	活動の記録
12	南澤の日記(1941年)	活動の記録
13	南澤の日記(1942年)	活動の記録
14	南澤の日記(1943年)	活動の記録
15	南澤の日記(1944年)	活動の記録
16	南澤の日記(1945年)	活動の記録
17	南澤の日記(1946年)	活動の記録
18	南澤の日記(1947年)	活動の記録
19	南澤の日記(1948年)	活動の記録
20	南澤の日記(1949年)	活動の記録
21	南澤の日記(1950年)	活動の記録
22	南澤の日記(1951年)	活動の記録
23	南澤の日記(1952年)	活動の記録
24	南澤の日記(1953年)	活動の記録
25	南澤の日記(1954年)	活動の記録
26	南澤の日記(1955年)	活動の記録
27	南澤の日記(1956年)	活動の記録
28	南澤の日記(1957年)	活動の記録
29	南澤の日記(1958年)	活動の記録
30	南澤の日記(1959年)	活動の記録
31	南澤の日記(1960年)	活動の記録
32	南澤の日記(1961年)	活動の記録
33	南澤の日記(1962年)	活動の記録
34	南澤の日記(1963年)	活動の記録
35	南澤の日記(1964年)	活動の記録
36	南澤の日記(1965年)	活動の記録
37	南澤の日記(1966年)	活動の記録
38	南澤の日記(1967年)	活動の記録
39	南澤の日記(1968年)	活動の記録
40	南澤の日記(1969年)	活動の記録
41	南澤の日記(1970年)	活動の記録
42	南澤の日記(1971年)	活動の記録
43	南澤の日記(1972年)	活動の記録
44	南澤の日記(1973年)	活動の記録
45	南澤の日記(1974年)	活動の記録
46	南澤の日記(1975年)	活動の記録
47	南澤の日記(1976年)	活動の記録
48	南澤の日記(1977年)	活動の記録
49	南澤の日記(1978年)	活動の記録
50	南澤の日記(1979年)	活動の記録
51	南澤の日記(1980年)	活動の記録
52	南澤の日記(1981年)	活動の記録
53	南澤の日記(1982年)	活動の記録
54	南澤の日記(1983年)	活動の記録
55	南澤の日記(1984年)	活動の記録
56	南澤の日記(1985年)	活動の記録
57	南澤の日記(1986年)	活動の記録
58	南澤の日記(1987年)	活動の記録
59	南澤の日記(1988年)	活動の記録
60	南澤の日記(1989年)	活動の記録
61	南澤の日記(1990年)	活動の記録
62	南澤の日記(1991年)	活動の記録
63	南澤の日記(1992年)	活動の記録
64	南澤の日記(1993年)	活動の記録
65	南澤の日記(1994年)	活動の記録
66	南澤の日記(1995年)	活動の記録
67	南澤の日記(1996年)	活動の記録
68	南澤の日記(1997年)	活動の記録
69	南澤の日記(1998年)	活動の記録
70	南澤の日記(1999年)	活動の記録
71	南澤の日記(2000年)	活動の記録
72	南澤の日記(2001年)	活動の記録
73	南澤の日記(2002年)	活動の記録
74	南澤の日記(2003年)	活動の記録
75	南澤の日記(2004年)	活動の記録
76	南澤の日記(2005年)	活動の記録
77	南澤の日記(2006年)	活動の記録
78	南澤の日記(2007年)	活動の記録
79	南澤の日記(2008年)	活動の記録
80	南澤の日記(2009年)	活動の記録
81	南澤の日記(2010年)	活動の記録
82	南澤の日記(2011年)	活動の記録
83	南澤の日記(2012年)	活動の記録
84	南澤の日記(2013年)	活動の記録
85	南澤の日記(2014年)	活動の記録
86	南澤の日記(2015年)	活動の記録
87	南澤の日記(2016年)	活動の記録
88	南澤の日記(2017年)	活動の記録
89	南澤の日記(2018年)	活動の記録
90	南澤の日記(2019年)	活動の記録
91	南澤の日記(2020年)	活動の記録
92	南澤の日記(2021年)	活動の記録
93	南澤の日記(2022年)	活動の記録
94	南澤の日記(2023年)	活動の記録
95	南澤の日記(2024年)	活動の記録

1993年8月、長野地方検察庁から56年ぶりに発見された農村青年社事件の東京控訴院判決書の原本。『資料集III』の編集完了後に『資料集』関係者が執念で発掘した貴重資料。

東京から来訪した農村青年社のメンバーを評して、信州北佐久の地で活動していた南沢袈裟松は「真面目にクソをつけたくらい」の人たちだったと言う。一方、当事者である星野準二は、農村青年運動を振り返ってこう語る。「五十八年にわたる永い道程の記憶のうすれを、資料の援けをかりて呼び醒ましなげらもこの「編を草し得た。繰り返す云う、これは裏返しに自己告発の記録であることを」(第一集)。また、故和佐田芳雄は言う。「ぼくは、農青でなければならぬと言わないかわりに、ぼくの確信した内容を、一方的な無意味な批判で否定されることも許さないといい感覚を持っています」僕らの思想の良心は、深く考えた思想を実現する為に、自分たちだけに正統性があるなどとは主張しないが、他方、たじろぐことのない自負をそこにみる。

私(たち)は資料集をまとめるにあたり、事実を確かめることに時間を費やし、「運動の事実」を記録することに専念した。事実を丹念に誠実に残すことが「あたりまえ」の主張を伝えることになると思ふからだ。記録は様々な読み方ができなければならぬ。それゆえ、ある思想体系、これが絶対的真実であると言う価値観に依拠し、そこへ事実をあてはめていく方法は当然とらなかつた。

いいかえれば、この『農村青年社事件・資料集』の解説は読み解く人の想像力の世界に預けていると言つてもよい。

ところで、農村青年社の人々の魅力はどこにあるかといえ、ひとつは満州事変の前夜、アナキズムを基底に置いた誠実な心情で、独自性を持って活動したことにある。だからこそ、農村で日々闘う読者たちに心情的共感を与え、時代に拮抗しえたのだ、と私は思う。現在を生きる我々がその活動の過誤をあれこれ語ることがはたやすい。しかし、彼らが空疎空論を否定し、自由を求めるアナキズムの理念を、他者との関係の中で実践したという事実、その意味は限りなく大きいと思ふ。そこに、農村青年社の運動が、七十年代以降様々な評者によって語り続けられている理由がある。私は、八木秋子さんがなくなつてからのこの十数年間、農村青年社の関係者、星野準二さん、南沢袈裟松さん、別所孝三さん、故和佐田芳雄さん、故山田彰さん、大島英三郎さん、故伊沢八十吉さんたちと語る機会を多く持つてきた。たいていは事実の確認ではあったが、垣間見えるその人たちの生きざまや関係に私は深く魅了されてきた。私は思う。メンバーの共有する「心情と姿勢」そして「自負」は、いつてみれば「存在の革命」を六十有余年にわたり問い続けてきたことに裏付けられており、それがこの資料集に表現されていると言つたら言い過ぎだろうか。その人たちと共同してこの資料集の編纂に関われたことを私は率直に誇りたい。

相京範昭「編集者 あとがき」(『資料集III』より、一部を抜粋して引用)